日　程　表

日次	月日	時間	行動
1	**8月3日(金)** 〈出発〉	6:30 14:00 17:00 23:00 4:00 5:00	成田空港集合 CA158便で成田空港出発 上海浦東国際空港到着 CA4514便で上海浦東国際空港出発 成都双流国際空港到着 成都空港商務酒店にチェックイン 宿泊:成都空港商務酒店
2	**8月4日(土)** 〈楽山市へ移動・ フリーデイ〉	8:40 10:00 13:30	ホテルロビー集合、朝食 楽山市へ出発 嘉州ホテルで歓迎会、ホストファミリーと対面 ホストファミリーと過ごす 宿泊:ホームステイ
3	**8月5日(日)** 〈フリーデイ〉	9:00 12:00 15:00 17:00	金鷹山荘に集合 ホストファミリーと過ごす 昼食(金鷹山荘内) ショッピングモールに移動 ホストファミリーと各家庭へ 宿泊:ホームステイ
4	**8月6日(月)** 〈文化芸術館〉	9:30 12:00～13:30 14:00～16:30 17:00	文化芸術館到着　中国伝統文化を学ぶ 昼食(菩樹素食) 文化芸術館　中国伝統文化を学ぶ 嘉州ホテル到着、ホストファミリーと各家庭へ 宿泊:ホームステイ
5	**8月7日(火)** 〈峨眉山・ 市長表敬訪問〉	8:30 10:00 12:00 13:00 16:00 18:00 18:20 20:00	嘉州ホテル集合 峨眉山万年寺を見学 昼食(万年j寺:精進料理) 清音閣へ移動・見学 五顕崗駐車場に到着・楽山市へ 楽山市役所到着、市長表敬訪問 楽山市政府主催歓迎パーティ ホストファミリーと各家庭へ 宿泊:ホームステイ
6	**8月8日(水)** 〈郭沫若旧居・ 楽山大仏〉	8:50 10:00 12:30 15:00 17:00	嘉州ホテル集合 郭沫若旧居を見学 昼食(私房菜) 楽山大仏を見学 ホストファミリーと各家庭へ 宿泊:ホームステイ
7	**8月9日(木)** 〈送別会〉	9:00 10:00 11:30 12:30 13:30 14:30～17:00 17:30～19:00 19:30	嘉州ホテル集合 峨眉山文武学校を見学 昼食(学校食堂) 楽山大仏観光地へ移動 船上から楽山大仏を見学 送別会(エジンバラ芸術学校) 派遣生が日本文化紹介を行う 送別夕食会(嘉州ホテル) ホストファミリーと各家庭へ 宿泊:ホームステイ
8	**8月10日(金)** 〈成都〉	8:20 10:00～11:30 11:30～12:30 16:00 18:30 20:00	嘉州ホテル集合 眉山柳江古鎮を見学 昼食(眉山柳江古鎮) 成都パンダ基地を見学 夕食(陳麻婆豆腐店) 成都空港商務酒店にチェックイン 宿泊:成都空港商務酒店
9	**8月11日(土)** 〈北京〉	6:30 8:00 10:45 13:30 15:00 15:30 17:00 19:20 21:10	成都双流国際空港に到着 CA4113便にて出発 北京首都国際空港到着 昼食(千禧酒楼:北京料理) 天安門広場見学 故宮博物院見学 故宮博物館を出発 夕食(金鼎軒:広東料理) 北京大方飯店にチェックイン 宿泊:北京大方飯店
10	**8月12日(日)** <帰国>	7:30 9:25 13:55 17:00	北京首都国際空港到着 CA925便にて出発 成田国際空港到着 現代産業科学館前到着・解散

「楽山市派遣を通して」

子安　美森

私は、この度の楽山市への派遣で初めて海外を訪れることが出来ました。

ホストシスターであるインインとは、ほとんど英語で会話しましたが、中国語の簡単な挨拶を教えてくれたため、少しだけ中国語で挨拶出来るようになりました。「謝謝」や「早上好」とホストファミリーに挨拶するといつも笑顔で応えてくれました。インインは、私が上手に英語を話せないため、紙に書いたり、ジェスチャーを使ったりして分かりやすく説明してくれるとても優しい子でした。また、インインに琴を教えてもらったり、学校の近くにある学生に人気のタピオカ屋さんに連れて行ってもらったりして、毎晩とても楽しかったです。そんな中でも一番楽しかった夜は、楽山第一中学校というインインが通っている学校で派遣生と派遣生のホストブラザーやホストシスターとスポーツをしたことです。４日間もみんなとバスケットボールや卓球やバトミントンをして遊ぶことができたのはとても大切な思い出になりました。

四川料理はほとんどが食べたことがないような辛さで、たくさんは食べることができなかったのですが、本場の辛い四川料理が食べたいという願いが毎食叶って嬉しかったです。また、楽山ではスイカがとても安いそうで毎食たくさん食べることができてスイカがとても好きになりました。

楽山にはトイレにトイレットペーパーが流せない、お風呂にバスタブがない、水道水が飲めないなど、日本と違うところがたくさんありました。日本はとても清潔で発達していると実感しました。街に出ると、路上で食べ物や花を売っていること、バイクにヘルメットをかぶらないで横向きに乗っていること、軽トラックの荷台にスイカがあふれるほど乗せて走行していること、犬が一匹だけで歩行者に混ざって横断歩道を渡っていることなど、驚きながらも自由すぎることが新鮮で、街を歩くだけでとても楽しかったです。

私は中国に行く前、中国に対してあまり良いイメージを持っていませんでした。日本を訪れる中国人観光客は、電車内で大きな声で話したり、順番を守らなかったりと日本人にとっては非常識な行為を普通にするときがあるため、少し自己中心的なイメージを持っていました。実際に中国を訪れましたが、ほとんどの人がイメージ通りでした。しかし、中国ではそれが当たり前なため、誰も嫌な顔をしていないし、口論も全く起きていませんでした。派遣を通して、私の中国人に対しての非常識というイメージは消えた上に、日本人は少し堅すぎるのではないかと感じました。お店の店員さん

は、私が中国語を話せないと分かると食べ方を一生懸命ジェスチャーで教えてくれました。楽山市民の方々はみんな優しく接してくれました。

送別会では、ホームシスターやホームブラザーが「朋友」という歌を歌ってくれました。その時は知らなかったけれど、日本に帰ってから和訳を調べたら、とても感動して泣きました。ホストファミリーとお別れするときは、インインのお母さんとハグをして、みんなで写真を撮りました。インインのお父さんとお母さんは英語を話せないため、「謝謝」と伝えることしか出来なかったので、もしまた機会があれば、中国語で感謝の気持ちをたくさん伝えられたらなと思います。インインには英語でお別れの挨拶をしたため、楽しかったこと、美味しかった食べ物、もう一回したいこと、お土産の話、感謝の気持ちを全部伝えることが出来ました。

この度、中国に行ってたくさんのとても貴重な経験をすることが出来ました。この経験は私にとって、一生忘れることのない素敵な思い出になりました。楽山への派遣活動に関わってくださった皆様にとても感謝しています。

今度は、私が海外からの派遣生の受け入れをしたいです。中国では、英語の会話文がすぐに出てこなくて少し苦労しました。そのため、文法も大切ですが、日常会話をスラスラと話すことが出来るように、英語を話すきっかけをつくりたいと思います。そして、私がインインに優しくしてもらったように、日本のたくさんのおすすめの場所に連れて行ってあげたいです。

国際交流協会の皆様、楽山市の皆様、一緒に楽山市を訪れたメンバーみんなに感謝しています。本当にありがとうございました。

「今回の派遣を通して」

高松　柊斗

僕は楽山で10日間をたくさんの仲間と一緒に過ごしました。この10日間は僕にとって大変貴重な思い出になったことは確かです。

僕は、楽山をとてもパワフルな国だという印象を抱きました。僕のホストブラザーは大きな川の近くであることもあって、朝に朝食を食べたのち、よく僕は川の近くをホストブラザーと一緒に歩きました。すると、あることに気がつきました。毎回、たくさんの人が踊ったり走ったり歌ったりしているんです。ただ単に運動するだけなら日本にもその文化はあるかもしれません。しかし、踊ったり歌ったりする人々は日本では見かけなかった気がします。

そのときは、お年寄りの方々が多かったように感じました。日本の夏休みの過ごし方と比較したときに、まず目立ったのがこの点でした。朝から運動するという習慣は、楽山の方がずっと盛んで、僕のホストファミリーは夕食後も運動するくらいでした。僕はそれをパワフルという言葉で表現します。僕は派遣前、かなりインドアな生活を送っていたのですが、楽山で生活する人々の様子から、エネルギー溢れる何かを感じて、これまでよりも朝を素晴らしいものだと思うようになりました。

また、パワフルというところで言うと、感情も熱かったように感じました。僕が一番印象に残っているのは、やはりホストファミリーのおもてなしです。ホストブラザーは、毎日明日何をしようとかこれから遊びに行こうとか積極的に僕に学ぶことをさせてくれました。向こうのお母さんは、よく笑う人で、それだけで元気をもらえたし、本物の家族みたいに僕とたくさんの写真を撮りました。お父さんはというと、仕事で朝からお見えになったことはなかったのですが、夕食以降からは僕とよく話してくれたし、カードゲーム（二七十）もしました。家族全員でとても盛り上がりました。ちなみに、このカードゲームは、ルールはすごく単純なのですが、楽山だけで遊ばれている伝統的なカードゲームであるようです。僕がそれを市川市まで伝えられるまでになったというのはとても貴重なことでした。このように、ホストブラザーはたくさんもてなしてくれました。派遣前は、中国とはなにかと雑な国だという偏見もあったため、その衝撃は大きかったです。暖かい気持ちにさせられて、今でもそのときのことを思い出します。

文化面でもかなりパワフルな印象でした。僕は二日程水墨画を描く様子を見ることができたのですが、画家さんたちは自然や人物を紙に書いて、その絵に躍動感というか力を与えていました。僕はそれよりもさらに印象に残ったことがあって、保育園で見た踊りの数々です。その踊りの全てが振り子のように規則的に振られながらも、まばらに生命的な動きをするのは、感動をそそりました。そのとき、僕は伝えたいことの奥にあるものを垣間見て、パフォーマンスから感情を揺さぶられました。

それらのことがあって、僕は楽山の精神的なものに揺さぶられて非常に感動しました。今後とも、それを忘れないで市川市と楽山市の関係を国際交流協会の一員としてより良いものにしていけたらいいなと考えています。

「回想」

田中　博章

高校一年生の夏休み。三年間という限られた時間の中、貴重な自分だけの時間である。しかし私はそんな貴重な時間をも夏季講習や家でいたずらに時間を浪費しようとしていた。春先までは。

高校に入りたてだった春先、私はこの楽山市への青年派遣に応募しメンバーに選ばれた。この頃は正直なところ、そんなことよりも学校生活に順応するので手一杯になっていたと思われる。しかしながら初めてメンバー全員が揃った時、みな個性があり大変面白い旅になると感じていた。更に、自分よりも優秀な学校に通っている人と話をしたり行動を共にすることは自分にとってとても新鮮で勉強になることもあった。
ここまでは旅までの謂れ、旅の仲間について話したが、ではいざ、旅の話を綴ることにする。

旅の始まりは八月初旬。この時期はフィリピン海でよく台風が発生し日本に襲来するが、我々の搭乗予定だった飛行機はこの影響をもろに受けてしまった。まず羽田から北京へ飛び、その後国内線を乗り継いでの成都空港、楽山到着という予定で、本来は羽田空港出発が九時半のはずだった。しかし台風の影響で羽田を飛び立ったのが午後二時、さらに北京でも国内線を待ちに待たされ結局成都空港到着は午前零時を回ってしまい、初日は楽山に着くことなく成都にて足踏みを余儀なくされた。
しかし翌日、成都から二時間車に揺られ楽山に着くと、そこには巨大な岷江と森林が生い茂る中に突然都会が現れたような、そんな光景が見えた。かつて詩聖・杜甫が見た自然豊かな風景と同じ風景を見ているのだと思うと、とても感慨深いものがあった。
その楽山の景色に欠いてはならないもの、それが楽山大仏である。正直なところ、自分は楽山大仏を甘く見ていたかもしれない。世界最大の弥勒菩薩を模した大仏であることは知ってはいたのだが、写真でしかその姿を見ることがなかった。しかし実際行ってみてみると、これは自分の考えが浅慮だったことを痛感する程の途方もない大きさだった。およそ七十一ｍという、鎌倉高徳院の大仏など取るに足らない大きさ(こちらは阿弥陀如来像なので比べるのはいささかお門違いのような気もするが....。)から中国の三千年という永い歴史を感じることができた。

大仏といえば仏教が連想されるが、後漢の時代に仏教が伝来して以降、中国三名山として仏教の中心地となったのが峨眉山である。標高三千九十九ｍの霊峰である峨眉山は豊かな自然の中に数多くの寺院や仏像が存在する。そんな中にあるのも相まってか大変厳かな雰囲気を醸し出していた。ただ、そんな歴史とは違い峨眉山の麓は活気

にあふれていて、数々の土産屋が軒を連ねていた。

更に、市川市と楽山市の姉妹都市締結のきっかけとなった人物、郭沫若氏の旧居を見ることも出来た。大きな記念館も作られており、やはり偉大な人物であったということが実感出来た。

その楽山市の市長と派遣団の一員として対話出来たのは自分にとって一生忘れられない経験となった。旅の前に中国語のあいさつや簡単な言葉を覚えていったのだが、その中の一つである「好喝　ハオハー」といったのが市長に通じたことがとても心に残った。稚拙かもしれないがその一言でも通じたことに今回の派遣団に参加した意義があったと感じた。

中国は近年、経済発展が著しく、どのような街に行っても必ず世界的な企業の店があったりする。しかしながら楽山や峨眉山のような素晴らしい伝統や自然に囲まれた街もあるということもわかり、訪れることができた。派遣団として楽山の人々と親交を深めあえたのと同時に、自らの見聞を広められた大変に素晴らしい旅であった。

「日中友好関係を感じられた夏」

中島　優香子

中国に10日間行って、感じたことや学んだことがいくつかあります。

まず一つ目に、ホームステイを通してコミュニケーションの大切さを学びました。ホームステイ中、言葉が通じずもどかしさを感じることが多々ありました。また、ホストマザーは英語がわからず、翻訳アプリを使い伝え合ったのですが、やはり正確には伝わらず苦労しました。会話はキャッチボールというように、どっちかが長くボールを持ってしまうと止まってしまうこともあり、リズム良くはいきませんでした。この経験から、人間がコミュニケーションを円滑にするためには、お互い言語がわかることが必要な条件だと感じました。しかし、身振り手振りのジェスチャーでもなんとかなるということも学べたうちの一つです。最初の日にホストマザーから洗濯の仕方を中国語＋ジェスチャーで教えてもらい、何となく向こうが言いたいことを理解し、洗濯を自分で全部出来たとき、感動したのを今でも鮮明に覚えています。また、笑顔は世界共通のコミュニケーションだと感じました。嬉しいとき、ニコッとすると向こうも微笑み返してくれます。言葉が通じずとも、お互い幸せな気持ちになれました。

ですが、ジェスチャーや笑顔だけでは限界があり、言葉があってこそのコミュニケーションなのだと強く感じました。これから英語をもっと向上できるよう、努力していきたいです。次に外国の方と話す際、中国で感じたもどかしさをまた感じないように、さまざまなことを話せるようにするのが今の目標です。

二つ目は、人との交流を通し中国の文化を学ぶことができました。私が驚いたことは、主に食事・交通などです。食事は四川料理なので辛いとは認識していましたが、予想を上回る辛さでした。また、飲み物がすべて温かいのにも驚きました。そして交通は車が異常に多く、テレビで見て知ってはいましたが実際に見ると、その多さに圧倒されました。日本人の私にとって横断するのも少し怖かったですが、日本ではできない経験がたくさんできました。

また、ホストシスターが日本のアニメなどを私よりもたくさん知っていたことに驚きました。こんなにも日本に興味があることに私は嬉しかったです。

三つ目は中国での滞在中に強く思い出に残っていることです。夜に総勢八名でトランプゲームをしました。もちろん意思疎通は英語でしたが、とても盛り上がり楽しかったです。日本にはないルールなどもあり、面白かったです。また、別の日にはバスケやバトミントンなどスポーツもしました。国は違っても同じ高校生、盛り上がるところは似ていると改めて思いました。

ホームステイ中、マンションのドアを大きな荷物を持って入るひとがいたので、おさえていたところ『謝謝』という言葉をかけてもらいました。現地の言葉で『ありがとう』と言われたことがとてもうれしく、心に深く残っています。こういう思い出ができたのも、短期間ではありましたが、現地で現地の人と生活をするという経験ができたおかげだと思っています。

今まで私は中国という国を、近い距離でありながら過去の歴史から考えると、少し遠い存在の国に感じていました。でも今回の派遣を通して、とても親しみのある国となり愛着のある国の一つとなったことがとても嬉しく思います。楽山の市長さんにもお会いすることができ、素晴らしい機会にめぐまれたことに感動しています。個々レベルの小さな活動ではありますが、これからの中国との関係がより深い絆で結ばれていくことを願っています。市川市青少年代表団の一員として、これからの活動に参加して派遣都市の方々との友好親善を深める架け橋となりたいです。

そして、この派遣を通して出会えたホストファミリー、中国の高校生、そして十日間ともに過ごした派遣団の仲間たちとの縁を大切にしていきたいと思います。

市川市国際交流協会の会長さんはじめ、職員の皆様、この派遣に関わってくださったすべての皆様有難うございました。引率者の川和田さん、渡辺さんお世話になりました。素晴らしい経験をさせていただいたことに感謝いたします。

「楽山市派遣を通じて」

藤田　駿

今回、中国の楽山市に国際交流派遣生として行きました。
私は海外に興味があり、中国にホームステイできる機会があったので応募しました。そして八月に行くことができ、とても良い経験ができたと思っています。

私は以前，オーストラリアにホームステイしたことがあり、その時にホストファミリーの方に積極的に話しかけに行く勇気がなく悔しい思いをしました。なので、今回はホストファミリーの方とたくさん話すことを目標に決めました。そして派遣当日、一日目にホストファミリーの方と会える予定でしたが，台風により飛行機が大幅に遅れ現地ではなく上海のホテルに泊まることになりました。しかし、二日目に無事楽山市に到着することができました。ホストファミリーの方に会う前はどんな方なのか、うまくやっていけるのか心配でした。でも、その心配はすぐになくなりました。ホストファミリーの方はとても優しく接してくれました。目標だったたくさん話すことはホストマザーが英語の教師をやっていたこともあって、達成できたと思います。

中国で衝撃を受けたことの一つに中華料理があります。日本の料理とは違い、辛い物がたくさんありました。私は辛い物が好きなので食べたいと思っていました。実際に食べてみると、美味しい物がたくさんありましたが、辛すぎたり、あまり口に合わないものもありました。中国ではウサギの肉を食べること知り、食文化の違いも実感しました。外に出てみると街の雰囲気にも衝撃を受けました。沢山の人が外で行動しておりとてもにぎやかでした。中国の人々は日本の人と違い自分の気持ちをちゃんと表現するらしく、話し声が大きかったり車のクラクションもたくさん鳴らします。他に驚いたことはトイレの個室の扉がなかったことです。このように中国で衝撃を受けたことがたくさんありました。

私の中国での目標の中に中国の文化を学ぶというのもありました。そして現地のさまざまな観光スポットにいきました。その中で一番印象に残っている場所は楽山大仏です。世界遺産にも登録されています。大仏を船に乗って全体を見ることができとても迫力がありました。こんなに大きい大仏を見たのは初めてでどうやって作ったのか不思議に思いました。他にも峨眉山に上ったり天安門に行きました。それらの場所で中国の文化を学ぶことができたと思います。
私はバスケットボールやっており、私のホストブラザーも好きだったので、よく二人で近くの学校のバスケットコートで一対一をしました。とても楽しい時間だったの

でバスケットボールのおかげで仲を深められたと思います。海外の人とでも同じ趣味を持っているだけで簡単に仲良くなれるのだなと感じました。そして、バスケットボールをやっていて良かったなと感じました。また、他のメンバーのホストブラザーやホストシスターとも一緒にカードゲームをしました。なんとかして知っている英語を使ってルールを説明しました。伝わった時はとてもうれしく、言語が違う人でも頑張って伝えようとすれば伝えられるのだと思いました。

このように中国での生活はとても充実した十日間になったと思います。日本では絶対にできない経験をたくさんでき、行ってよかったと思っています。中国に初めていってみて、日本よりもにぎやかでこんな国があるのだなと思い、とても良い刺激を受けられたと思っています。ホストファミリーとの別れの時はとても悲しかったですが、とても仲良くなれ、やさしくしてくれたので感謝の気持ちを忘れてはいけないと思いました。いつかまた会いに行きたいです。帰ってきて感じたこともありました。日本は他の国と比べてとてもきれいな国だと気づきました。そして、やはり日本が一番落ち着くしいい国だと実感しました。

最後に、今回、こんなに良い経験をできたのは、親や市役所の方々、中国で歓迎してくれた方々などいろんな人の協力があってできたことです。本当にありがとうございました。この経験を将来に活かしていきたいと思います。

「楽山市への派遣で学んだこと」

藤村　幸輝

兄二人が市川市青少年代表団姉妹友好都市派遣生としてドイツ、インドネシアを訪問した際の経験を聞いて、憧れと期待で自分の機会を待っていました。今年はアメリカと中国の二つの選択肢がありましたが、まだまだ変わり続ける熱気を体感したくて迷わず中国を選びました。事前の情報では、四川省だけに料理の辛さばかり強調されていました。

派遣先ホストファミリーは二歳年上の男子高校生。事前に英語メールで趣味を聞きあいました。英語で次々発信されるメールに「すごいなぁ」と感じました。ご両親とも教師、バスケをやっていて英語がしっかり。やや圧倒されかけましたが、日本のアニメ好きな少年とわかり少し安心しました。写真はなかったので想像はふくらみました。「何が気にいるかなぁ」とおみやげ選びから気合が入りました。

七人の派遣生仲間は９日間の旅程の初日から、台風の影響で最終到着空港である成都へは十時間遅れて到着という波乱の洗礼を浴びました。でも中国初上陸となった上海空港で不安のなか予期せぬ長時間を仲間と過ごすことにより、元々仲のいい六人チームはさらに結束感が強まりました。まさに今年を象徴する台風で地固まると思うようにしました。

一日遅れで空港からバスで二時間。いよいよ楽山。想像を超える素晴らしい絶景をこれでもかと見て、歓迎セレモニー会場に到着しました。緊張のホストファミリーご対面。想像通りの優しそうなお兄さん、真面目そうなご両親。これからの１週間に思いを馳せました。

ホームステイでは中国楽山の普通の家庭のいつもの生活にそのまま入りこんだという状況を体験しました。日本の家庭と同じく、車を皆所有して多くの人がマンション住まいをしていますが、何か少しずつ異なる衣食住の習慣を肌で感じることが出来ました。テレビをあまり見ず、中国将棋などをよくやりましたが、お兄さんは受験生でもあったのでよく勉強していました。この姿勢には刺激を受け、市川側も負けてはいられないなんて感じたりもしました。ご多聞に漏れず“四川風”の山椒系辛料理は連日食べることになりましたが、私の胃袋は全く異常を来たさず頑張ってくれました。

観光もこれぞ楽山という場所、文化を堪能しました。市川市と楽山を結び付けた郭沫若さんの生家をはじめ、楽山といえば誰もがこれと答える世界遺産の楽山大仏、パンダがたくさんいる成都パンダ基地、地元小学生によるカンフー演武、それに峨眉山

などなど。あの巨大で有名な楽山大仏の大きさは私の想像をずっと超えていました。人間たちはアリより小さい存在になっていました。

さよならパーティーでは、楽山の方々からは伝統的な踊りや、伝統楽器と唄を披露頂き、私たちは、事前研修で練習したソーラン節を踊ったり、日本の伝統的遊びを教えてあげたりしてささやかながら文化交流が出来たと思います。楽山での最終日、メンバー全員とホストファミリーの皆さんが集まり、今後の再会を誓ってお別れをしました。人生初のホームステイ、人生初の親とは別行動での海外、慣れない食事と緊張の連続でしたが、楽しみが多く、結束のいい派遣メンバーのおかげであっという間に過ぎ去りました。

中国を発つ最後の訪問地は首都北京。ニュースでお馴染みの人民広場。あの毛沢東の写真を見てまた感動です。最後は観光客のメッカ故宮博物館で締めくくりでした。こうして無事帰国出来て、平成３０年市川市青少年代表として交流の場を作って下さり、事前研修を実施して頂き、訪問に同行頂いた市川市の国際交流協会の皆様には感謝でいっぱいです。今回経験した一家族との家庭での交流から、市川市楽山市の市レベルの交流、それに連日経験した異文化との出会いの体験、派遣生仲間と市川市の代表として作り上げる活動、そして助け合った経験、これら全てを自分の中で大事にして、これからの高校生活に活かしたいと思います。楽山で出会った同世代の人たちに誇りを持って再会出来るよう頑張ろうと思いました。

「違いを楽しむ」

山口　駿弥

今回の派遣で僕は「日本と中国の違いを肌で感じる」ということを自らの参加する目的として心に決め、派遣中過ごしていた。中国の方の一家と、同い年の高校生である梁君と六日間過ごすことで、ホテルに宿泊する普通の観光旅行とは異なった、中国の日々の生活、様子を体験し、日本との大小様々な違いも、そして似ている・同じ点もたくさん発見することが出来た。

まず、日本と異なる点として第一に感じた点が食事である。予想はしていたものの、案の定辛い料理が多く、辛い料理はあまり食べられなかった。中国の辛い料理は香辛料が日本とは異なり山椒が強いので、舌に後から来るような辛さで食べられなかった。ただ、レストランでの食事は円卓であったため、自分の苦手な料理は取る必要がなく、食べたい料理だけを選んで取れたので、全体的に食事を楽しむ事が出来た。また、中国の食事は、あまりマナーにはこだわらず、皆で話をしながら楽しんで食事をしていた。

次に、中国では夕食の後に散歩や運動をするために外出する人が多いという点である。僕のホストファミリーも、ほぼ毎日夕食後に、近くの公園や学校、ジムでスポーツをして楽しんだり、買い物をしたり散歩をしたりと、リフレッシュの時間を過ごしていた。川岸で太極拳をしたり、ダンスを踊っているグループもいて、夜でも街が賑やかだった。暑い日中を避けて、涼しい夜間に外出するというのは理にかなっている事であるし、家族の親睦を深めることにもつながり良い事であると感じた。

また、国土も人口も非常に大きい国の中国らしく、楽山大仏も空港も道路も、西瓜までも、もののサイズが日本よりも大きいように感じた。世界遺産の楽山大仏は、高さが七十一メートルもあり、世界最大の大仏であるという。道路もとても広く、片側だけで五車線もある道路があるなど、とてもゆったりとつくられていた。西瓜も日本のものよりも細長く、そして安いので、普段ひと夏に食べる量よりも多い量を中国にいる間食べる事が出来た。

中国では、このような違う点だけでなく、日本と同じである点、似ている点もたくさん見つける事が出来た。

中国では、もちろん箸を日常的に使っていたし、扇子や団扇、本にはさむしおり、竹でできた御座や、入れ物も見かけた。日本が古来より中国から様々なことを学び、取り入れてきたという歴史を実感することが出来た。街の中の至る所にお寺や祠を見

かけ、日本と同じように仏教が信仰されてきたということを感じた。少し車で走れば辺り一面には田んぼが広がっており、ここにも日本を重ね合わせる事が出来た。

中国では日本と違う点も沢山見かけたが、それと同じくらい、あるいはそれ以上日本と同じだという点も見つける事が出来た。このような相違点や類似点を沢山見つけられたのは間違いなく中国の人と会話したり、食事を共にして交流出来たからだ。中国に行こうと思わなければ、このように多くの「発見」をすることは出来なかっただろう。

今回の中国への派遣を通じて僕は、このように日本との相違点や類似点を沢山見つけると同時に、やはり「百聞は一見に如かず」だと強く実感した。中国出身の友人も僕の周りにはおり、その人から中国について聞くことで、何となく中国について知った気になっていたが、実際に自分の目で見る事はそれとは大きく異なっており、深くまで知ることが出来た。

また、現地で実際に日本のアニメや漫画が好きだという高校生に会ったりすることで、外から改めて市川市や日本について考えるきっかけにもなった。トイレやお風呂等の水回り等に代表される日本の良さと、人と人の間になんとなく感じる距離の遠さといった良くない点、これらを知ることが出来た。中国に行くことで、もっと日本について知る必要があることに気付いた。

これからも、中国で出会った梁君をはじめとする中国の高校生やホストファミリー、そして一緒に行った仲間を大切に、そして新しい人にも出会って、人の輪を広げていきたい。そして、積極的に国際交流をしていきたい。

「派遣先での人との交流を通して感じたことや学んだこと」

引率者　渡辺　深鈴

今から４年前の私が高校１年生だった時、ずっと憧れていたアメリカの、姉妹都市のガーデナ市への派遣が決まり、旅行では味わうことのできないような現地の人の暮らしを体験したり、日本とは違う驚きの連続の文化を体験することができた。そして何より、異国の地に始めて友達ができたということがものすごく嬉しかった。当時は英語が喋れたわけではなく、言葉が通じず悔しい思いをたくさんしてきたのだが、それでも一緒のことでワイワイして遊んだり、共に楽しいひと時を過ごしたことは私の大切な思い出だ。

今回派遣された学生たちには私が経験したような素敵な経験をしてもらいたいと思っていた。今回市川市から楽山市への派遣がかなり久しぶりということもあったかもしれないが、成都到着から北京を出発するまでずっと、現地の方々は常にあたたかいおもてなしをしてくださった。

何不自由のない充実した毎日を中国で送っていった中で、私は去年のある出来事を思い出した。それは昨年市川市に訪れた楽山市からの派遣団についてだった。私は昨年、楽山市の学生たちと梨園見学や鴨川旅行、ディズニーシーなどを一緒に回って行動したが、参加していた学生会の人数がとても少なく参加しているメンバーも毎回同じメンバーのように感じていた。当時市川市に訪問していた楽山市からの派遣団の中の数人が、今回受け入れをしてくださったが、彼らは訪問者の私達をいつも気遣ってくださった。特に印象に残ったことは、楽山市滞在 2日目に日本の派遣団がクッキー作りを体験することになったのだが、引率者は特に何もすることがなくなってしまった時のことである。楽山市の学生達は自分達が主体となって、一部の学生達は私達引率者を行きたいと言っていたスーパーマーケットへ、残りの学生達はクッキー作りをする日本の学生達への言語面でのサポートへと回ってくださった。

私はスーパーマーケットへ行ったのだが、私が中国で人気のお菓子を買いたいと伝えると、学生達は様々な種類のお菓子を紹介してくれたり、中国で有名な食べ物など現地の人達しか知り得ない情報をたくさん教えてくださった。中国語が読めない私にどのような食べ物なのかも丁寧に説明してくれた。試食コーナーを見つけると、食べてみて！ と試食をもらって来てくれたりもした。常に楽山市の学生が共に行動をしてくれたことが、スーパーマーケットで抱いた疑問は全て解決され、より深く現地の人の日常生活を理解することができた気がした。

また、自分自身の成長も感じることができた。先ほども言った通り、4年前にガーデナ市に行った時は全く英語を喋ることができず、悔しい思いをたくさんして来たのだが、今回楽山市の学生達と関わって自分の英語力が伸びたことを実感することができた。普段大学で 英語を学んでいるが中々過去の自分と比較する機会はない。今回英語を流暢に話すことのでき

る楽山市の学生達とたくさん関わった事が自身とさらに英語をもっと上達させたいというモチベーションにもつながった。

このように今回私たち日本からの派遣団が中国での滞在を心から楽しむことができたのは、楽山市のほぼ全員のホストブラザー・シスターの学生達が毎日の行程を一緒に過ごしてくれたからということが１番の大きな要因だったのだと私は強く思う。やはり、同年代の人たちが毎日一緒に過ごしてくれることはすごく派遣団にとって嬉しく、楽しいことである。

この派遣で学生会員の積極的な受け入れの参加、つまり学生が主体の受け入れシステムの大切さに気付かされた。これからどのようにして学生会を再建するかということが私達学生会員の課題だと考える。今回楽山に派遣された日本の学生たちには、楽山で得た異国の友達 との絆を大切にし、さらに、自分たちが現地で受けたおもてなしを忘れずに、これから毎年来る市川市の姉妹都市の学生団の受け入れを積極的に行っていって欲しいと切に願っている。

市川市　文化スポーツ部
国際交流課引率者　川和田　遼

遠遠的街灯明了、好像閃着無数的明星。
（遠くに見える街明り、まるで無数の星のようにきらめく。）
天上的明星現了、好像是点着無数的街灯。
（天上の明星が現れ、まるで無数の街灯が点滅しているようだ。）
我想那縹渺的空中、定然有美麗的街市。
（私は想う、あの遠くかすかな星空に、きっと美しい街があるはずだ。）

今回私は、市川市青少年代表団の引率者として、友好都市である中華人民共和国四川省楽山市を訪問しました。

上に掲げたのは市川市と楽山市の友好都市締結のきっかけとなった郭沫若（1892～1978）が日本滞在中に詠んだ「天上的街市（天上の街）」という詩の冒頭一部分です。天に輝く星々のきらめきを、遠い街の灯りと重ね合わせる美しい詩ですが、その向こうには遠く離れてしまった郷里・楽山を想う郭沫若の心情が透けて見えるような気がします。

さて、我々の楽山市へと向かう道のりは美しい星々の光ではなく、上海上空の強烈な台風によって迎えられました。成田空港から搭乗予定の便は台風の影響で遅れに遅れ、乗継地である上海でもいつ次の便が出るのかわからず、最終的に約20時間かかって成都に到着し…等々といろいろなエピソードがあるのですが、楽山市で見たものや学んだこと、道中の事件などは、今回の派遣の主役である派遣生の皆さんがそれぞれの視点で感想文を書いてくれていることと思います。そこに重ねて私自身の個人的な感想を書くよりも、ここでは、日本にいるとなかなか知る機会のない「楽山市が実際どのようなところだったのか」ということをご紹介したいと思います。

〇気候…今年は日本各地で異常気象さながらとても高い気温が続きましたが、楽山市も離れているとはいえやはり同じアジア、とても蒸し暑く、日本と大差なく感じました。ですが、自然が多いせいか、朝夕は若干過ごしやすく、ホテルの前を流れる大渡河からは涼しい風が吹くこともありました。雨が多いと聞いていましたが、滞在中は晴れている日の方が多かったように思います。

〇街並み…成都から車で2時間ほどかかることもあり、少し田舎というイメージがありましたが、実際は中心地には大きなビルやショッピングモールもあり、日に日に発展しているような印象でした。それでも北京のように高層ビルの建ち並ぶビジネス街、

という感じもなく、のんびりした雰囲気も残っていました。街自体がとても大きいので、楽山市役所の近くは昔ながらの街並みが残り、河を渡ると企業のビルや工場が並ぶ新しく整備されたエリアがあり、楽山大仏のある一帯は観光客で賑わうなど、様々な顔を持つ街でした。

〇食事…「四川料理はとにかく辛い」と聞かされていましたが、辛い物が好きなこともあり、個人的には食べられないほど辛いと感じたことはありませんでした。むしろほとんどの料理が美味しかった印象です。辛さよりも、花椒の「麻（マー：痺れるような刺激）」と五香粉などのスパイスの香りが印象的でした。現地ではホテルの食事では出てこないローカルな名物も紹介してもらいましたが、「鉢鉢鶏（真っ赤な辛いスープに、細い串に刺さった肉や野菜を浸けて食べる料理）」や「豆腐脳（スープに入ったおぼろ豆腐に、色々なトッピングが乗っかっている料理）」が人気とのことでした。

〇芸術…特徴的だったのは「書」の文化的重要度の高さでした。日本で美術といえば絵画作品を思い浮かべる方が多いと思いますが、中国では美術館や文化芸術館などどこに行っても、絵画だけでなく書が置かれていました。他に楽山市の有名な芸術家の作品としては、木の根で書などを表現した立体作品や山水画、花鳥画などをご紹介いただきました。日本でも書や水墨画は独自の発達を遂げましたが、その発祥の地である中国では伝統が現代まで一直線に力強く連なっており、日本文化のルーツ、その多くが中国にあることを改めて認識させられました。

〇人々…バスなどに乗るとまず気が付くことが、皆さん話す声が大きいことです。やはり大きな国なので、しっかりと主張をしないといけないということかもしれません。言語の面では、特に年配の方はあまり英語が通じず、ここは日本と似ているように感じました。夕方、街を歩いていると、ご婦人方が公園でエアロビを踊ったり、道端に即席の理髪店ができて髪を切っていたり、上裸になって公園の遊具で体を鍛える中年男性がいたりと、大らかに生活している様子でした。また、今回派遣に関わっていただいた人々は皆親切で優しかったです。

　以上、はじめて楽山市を訪れた印象をいくつかご紹介しました。
友好都市とはいえ、実際に両市の人と人とが触れ合い交流する機会は、まだまだ多いとは言えないのが現状です。ですが、この文章や代表団の皆さんの感想文を通じて、少しでも楽山市が身近に感じられれば、両市の友好がますます深まるのではと期待しています。